

# 二枚の絵と “strange” なるものの終焉

— The Old Man and the Sea に関する一考察 —

吉 富 広 和

" [Hemingway] discovered God, a Creator. This time, he wrote about pity. " (1)

[ I ]

「時間」の問題から考察を始めたい。作品の冒頭で、主人公が陥っている“eighty-four days”の間の不漁という状態が伝えられる。The Old Man and the Sea がその象徴性を特徴として持っていることは今さら言うまでもなく、作中の「数」に対してもnumerologicalな解釈が可能であるが、私達はこの“eighty-four”という数が相当に長い期間を表わしていることと、その長く滞る時の重圧を科せられている主人公が老齢であってみればそれが彼の人生、すなわち年齢をも連想させることに注目すれば十分であろう。Rovit & Brenner が指摘しているように、<sup>(2)</sup> 漁師たる主人公が“the archetype Man”であるとすれば、長期間の不漁という試練を担った老漁師の“saga”が何時でも何かを待っているような人の一生という水面下の意味を連想させる形で始められていると言えるのである。

不屈の主人公は、当然、“the eighty fifth day”も漁に出る。前夜、彼を慕う少年Manoloに主人公は“I will wake you in the morning”と言うが、それに続く二人の会話はやはり象徴的である：

“You’re my alarm clock,” the boy said.  
“Age is my alarm clock,” the old man said. (3)

「年寄り朝が早い」というdenotationに加えて、「老齢が警鐘である」という表現には迫り来る死期を想わせるものがある。「時間」はclimaxを前にして緊迫しているのである。作品は不漁の時と人生の時との二重の意味で終わりが近いこと、すなわち悲劇的又は喜劇的結末を目前にした密度の高い時間を冒頭で伝えているのだ。「矢」としての時間がその終焉を迎えるまでの寸刻がThe Old Man and the Sea を支配する時間なのである。

主人公に身寄りがいないことも又この時間の観点から捉えることが出来よう。Hemingwayの多くの主人公達がそうであるようにSantiagoも天涯孤独であり、そして、この点こそが彼の“the archetype Man”としての存在証明になると思われるが、孤立無援で外的世界に直面している。そんな老主人公には、しかし、次代を担う弟子とも言うべきManoloという少年がいるけれども、やはり主人公は、少なくとも物理的に、作品の大部分を占めるantagonistとの“battle”において完全に少年とは隔離させられているのである。作品の半ば以降に繰り返し発せられる主人公の独白：

“I wish the boy were here.”

又は、

“I wish I had the boy.”

の様々な variations 群が主人公の、すなわち深層においては人間の、孤独を再三再四確認させるような響きがある。

しかし、私達にとって尚重要なのは、この refrain が「矢」としての時の持つ緊迫感の高揚にも与って功あるという点であろう。つまり、生命に限りがあるという意味で有限な「個」としての人間が「種」としての連続の中に無限、永遠なるものを投影するという地上的営みが、作中の主人公に対して拒絶されているのである。「矢」としての時が支配する状況で、死期に近い主人公には次世代の中に復活するという「環」の時の効果は否定されているように思われる。さらに、終末論的な時の緊張感は増して行くのである。

一つの文が句点によって完結し、文意が明確化されるものであってみれば、The Old Man and the Sea も又速い時の矢に運ばれて終には私達に何らかの意味を語ってくれるのであろうか。作品は当初からすでにその予感を匂わせている。

## [ II ]

主人公が住む “shack” の内壁には二枚の絵が掛けられている：“The Sacred Heart of Jesus” と “The Virgin of Cobre<sup>(4)</sup>” とである<sup>(5)</sup>。これらの絵が徒らに掲げられていないことは言うまでもなく、その象徴的な意味に関しては、作品全体を一種のキリスト教的 parable として解釈を行なった Carlos Baker も注目するところである<sup>(6)</sup>。筆者も又これら二枚の絵が作品の、すなわち漁のそして人生の、出発点でもあり帰着点でもある場所に置かれ、作中に緩なす種々な連想や images を貫く中心線とでも言うべき象徴的価値を有していることを特に構造的に明らかにしたいと考えるのである。

漁師である主人公の性格描写が希薄であることが、かえて彼を “Man” の archetype たるしめていると思われるが、主人公の置かれている状況からして、すなわち忍耐と持続力を試される ordeal が科せられている状況に悲劇的或は求道の運命を読み込むことは容易であろう。事実、King Lear や Job と主人公との連想はよく為されている<sup>(7)</sup>。加えて、主人公 Santiago が “St. James” のスペイン名であることを思えば<sup>(8)</sup>、元より “the fisherman apostle” の役割を主人公が担っていると仮定し得るであろう。

してみると、この漁師が追い求める魚それ自体は救い主であらねばならない。その証左としては、“Ichthys” という魚を意味するギリシア語が “Jesus Christ, Son of God, Savior” の頭文字を組み合わせたものであることから “fish” が “Jesus” の謂として伝統的に用いられているということがある。が、より作品に即しては、主人公の ordeal の場である海が冒頭で “a fishless desert” と呼ばれており<sup>(9)</sup>、これは老齡と不漁の重く沈滞する時が「救い主」の出現を待ち望んでいる状況を象徴するものであり、“The fish”こそが正に「救い主」であるという連想が可能になる。さらに、その待ち望まれていた魚

が主人公と釣り糸によって結ばれ、二日目の正午近くにしてようやくその雄姿を初めて海上に現わすが、その姿こそは何人にも海の「主」に価すべきものであることを納得させずにはおかないものである：

... He [i. e. the fish] was bright in the sun and his head and back were dark purple and in the sun the stripes on his sides showed wide and a light lavender. (10)

摩擦音の多用によって勢よく水を切る様が生き生きと描写されており、陽光に輝く (in the sun が二度も使われている) その身は王候 (purple) とその芳香 (lavender) との属性を与えられている。

次に、この主たる魚が宿り、それを追い求める漁師が舟を浮かべている海それ自体が持つ image を考えてみたい。戦い続けるという孤独な人間の営みを通して、自然の一部分としてのその存在の認識、或は“Creation”に対する謙遜をこの作品に読み取ることも可能であろう<sup>(11)</sup>。そして、この観点から、主人公の自らの活動の場である海に在ることの感想：

No man is ever alone on the sea. (12)

は、孤高の老漁師の全てを包み込む大自然を認識した達観の逆説的な表現として解釈出来るのである。このような包容力ある自然を母性的又は母胎的なものとして捉えた時、「母」なる「海」の連想は容易であろう。

実際、gender を sex へと飛躍させての議論ではあるが、主人公は「海」を、男性形の“el mar”を退けて、“la mar”と女性名詞で呼ぶことに固執している<sup>(13)</sup>。日常的には“a fishless desert”であるはずの海が全てを包み込む“la mar”として達観視された時、この海は救い主 (= fish) を宿す母胎としてキリスト教的 symbolism の価値を有するのである。

他方、Coleridge の“*Ancient Mariner*”に比して Hemingway のそれが“hubris”なき点を捉え、主人公自身にキリスト像を投影して、作品を“martyrdom”の物語と解釈する場合もあるが<sup>(14)</sup>、その論拠の一つとなるのが、主人公が作中文字通り運び (= bear)、又彼の背景ともなる“mast”である。勿論この“mast”は“cross”を連想させるものであり、故なき“crucifixion”と主人公とを結び付ける効果がある。私達は、しかし、この“mast”が Freud 的には「男根」の象徴であったことに注目しておきたい。主人公は攻撃的な「男性」という役割を武器のように最期まで担わされているとも言えるのだ。

“mast”が男根の象徴であれば、普通女性代名詞で受ける「舟」は「女性それ自体」のそれでもあった。してみると、ここに一つの symmetrical な構図が出来上がる。女性とし

ての舟に居る男性である主人公と母胎たる海に居る救い主たる魚とが一本の糸で結び付けられているという構図が。

### [Ⅲ]

すでに言及したように、主人公Santiagoが個別、具体的性格描写を欠いていることが却って彼を“Man”たらしめ、作品を一種の“myth”にしているが、この“Everyman”が置かれている世界はHemingwayが一貫して表現し続けた暴力的現実と変わるところはないように思われる。漁師である主人公は自らの生業を通して、正しく弱肉強食の食物連鎖の論理が支配する自然主義的な世界に直面しているのだ：

... everything kills everything else in some way. (15)

このような弱肉強食の世界に在って主人公は一人戦い続けなくてはならない。そして、中世以来のキリスト教的世界図では人間がこの食物連鎖の頂点に置かれてきたのである。Hemingwayにしてもその自然主義的世界観は常に、孤独ではあるが威厳に満ちた人間肯定の様相を呈している所以であろう。鮫の襲来に覚悟を決めた主人公の台詞：

A man can be destroyed but not defeated. (16)

はその典型的な表現と言えよう。

しかし、たとえこのCreationによって説明されるキリスト教的世界図が知的な人間肯定の側面を有しているとしても、それは殺すか殺されるかという現実には直面した時には越えられるべき表層にすぎないのである。前の引用に続いて主人公は次のような表白を行なっている：

... I was more intelligent than he [i. e. the dentuso] was. Perhaps not, he thought. Perhaps I was only better armed. (17)

このようなdesperateな経験を通して初めて、Descartes的理性に裏付けられた楽観論を超えるという意味で、自分もその一部であるCreation或はnatureに対する真の認識に至るのではあるまいか。

作中、主人公は時に他の生物に対して“friend”や“brother”という呼びかけを行なっている。又、糸で結ばれた最大の敵にはあらゆる敬意を惜しまないのである。これらを東洋的animismや仏教的人畜不可分論によって説明することは安易であり早計でもあろう。人間を最も空しくした場合の自然との一体感、これはある意味では仏教的と言えないで

もないが、暴力的現実を生きたHemingwayは到達したのである。そしてこの点こそは The Old Man and the Sea が多くの批評家によって初期の作品に比して「厳しさが欠けている」とか“nihilism”の緩和とかを論ぜられるところとなっているのだ<sup>(18)</sup>。

優れてromanticな表現によって老漁師は自分の生業を的確に評している：

... it is good that we do not have to try to kill the sun or the moon on the stars. It is enough to live on the sea and kill our true brothers. <sup>(19)</sup>

これは現実に縛られるべき人間のironicalな謂である。この世では超えられない弱肉強食の共食いという日常に人間は縛られており、あくまでも戦わねばならない現実を是とする、或は是とせざるを得ないのである。ところが、人間が“brothers”を殺すのは唯単に肉体を物理的に維持するために留まらないというところに思索が至って、主人公は人間に根源的な“sin”の問題に目覚めることになる：

... he thought much and he kept on thinking about sin. You did not kill the fish only to keep alive and to sell for food, he thought. You killed him for pride and because you are a fisherman. <sup>(20)</sup>

生きることは、蓋し、それ自体罪深いことなのである。

作品のclimax：誇り高き老漁師の生涯一の獲物が鮫の餌食になり「無」に帰さんとする時、ここに魚即キリストの連想からPassionのimageを投影することも当然可能であるが、主人公の口から洩れる言葉は“Aye”の一語であった<sup>(21)</sup>。もしこの“Aye”を文字通り自然主義的世界に在って「無」を含んだ全てを是とする境地の表白であるとすれば、この一瞬にこそ“defeat”され得ない人間の証がキリスト教的諦観によって与えられていると言えよう。

#### [IV]

主人公は作品中二度自分のことを“I'm a strange old man”と称している<sup>(22)</sup>。この“strange”という形容詞は語源的にはOF. の“estrangle”の語頭母音が消失したもので、英語としては13世紀から記録に残っているが、その中心的な意味は以来“belonging to another place”である<sup>(23)</sup>。主人公は自らを帰属する場所を他に持つ言わば“outsider”と評しているのだ。この点に作者Hemingwayの自己投影を見出し、伝記的或は文学史的な考察を行なうことも可能であろう<sup>(24)</sup>。私達は、しかし、今しばらく作品に集中し、“strange”なるものと主人公、archetypalには「人間」というべきか、との関連を考え

てみたい。

“Eighty-four days”以上もの長く滞っている時間の中に一人置かれている主人公の孤独は、世代の隔絶を表わす“I wish the boy were here”や“I wish I had the boy”等の繰り返しによって尚その深まりを増して行くことはすでに述べたが、このrefrainsは、同時に、大海の中でたった一人で敵に対峙しているという空間的な孤立の表現でもあることは言うまでもあるまい。偉大なる獲物を求めて自ら内海より“too far out”して行った誇り高き漁師であってみれば、時間的にも空間的にも帰属する所を持たない“strange”なる属性は、言わば自ら引き受けた試練であろう。

この孤高の漁師が自分と釣り糸で結ばれた敵対者に対しても同じ“strange”という形容を行なっていることは注目に値する：

“If you're not tired, fish,” he said aloud, “you must be very  
strange.” (25)

対立する者同士が同じ属性を持っているというsymmetricalな構図が再び確認され、かくして作品はintrospectiveの様を呈してくる。Protagonist即antagonistという構造によって客体化された自己をNarcissus的に愛でるということが為されるのは当然である。魚に向かって漁師曰：

I love you and respect you very much.

しかし、作品の要はこれに続く言葉である：

But I must kill you dead .... (26)

敵が自己を投影するに値するものであり、尚その敵を殺すということは投影されている主体の破壊行為でもある。そして物語そのものも両者の類似性があるという意味で平行する死を伝えて終わっているのである。客体化した自己を殺すこととその主体自体の死とを対称させることで作品は一体何を語ろうとしたのであろうか。

殺すという行為が主人公にとって単なる同類の殺りくより以上のものを意味していることをその場面に即して考えたい。まず、主人公がもりで敵対者にとどめを刺す場面を引いてみよう：

The old man ... lifted the harpoon as high as he could and drove it down with all his strength, and more strength he had just summoned, into the fish's side just behind the great chest fin ....

He felt the iron go in and he leaned on it and drove it further and pushed all his weight after it. I [i.e. the old man] have killed this fish which is my brother ...

I think I felt his heart, he thought. When I pushed on the harpoon shaft the second time. (27)

さらに、老人は舟に獲物を結え付け、それが「夢」ではないことを確かめながら回想する：

... when he had seen the fish come out of the water and hang motionless in the sky before he fell, he was sure there was some great strangeness and he could not believe it. (28)

ここで私達は、主人公は魚を“brother”と呼んでいるけれども、自己の分身としての敵対者を殺すという行為が“strange”なるものの終焉という意味を帯びていることに注目しておきたい。

老漁師の戦利品は、だがしかし、まもなく鮫の餌食になり無に帰してしまう。その climax で発せられる「翻訳不可能な」間投詞“Aye”は人生の空しさ：“nada”を受け止める pessimistic な響きがあった。作品は人生即「夢」の遠観を思わせる主人公の死で終わっている。その antagonist の死が“heart”を刺し貫かれたことによったのと並んで老人も胸を煩って永の床につくのである。主人公は戦利品に群がる鮫に“Eat that ... And make a dream you're killed a man.” (29) と言いながら胸の吐物を吐きかけたことを小屋で回想している：

In the night I spat something strange and felt something in my chest was broken. (30)

“Strange”たる点において、主人公とその敵対者は見事に一である。そしてこの strangeness が弱肉強食の自然主義的世界における孤立すべき人間存在のあり方の謂であるならば、死は“too far out”していた“outsider”の帰着点であり、そこに至って初めて strange なるものが贖なわれるということであろうか。

魚即キリスト即主人公の連想をここでも働かせると、私達はキリスト教的な strange なる人間存在に対する贖の一つの暗示を認めないわけにはいくまい。永眠する主人公を二枚の絵が見守っている。その一は“The Virgin of Cobre”であり他は“The Sacred Heart of Jesus”であったのだ。

作品は淡々と受難を連想させる主人公の死に至る過程と猫に顕著なそれに対する現実世界の無関心とを伝えて終わっている。結局、物語は主人公の最期の数日間を時の矢にのせて描いたのであるが、読者がpathosは感じて悲劇に一般である喪失感を持たないのは現世の絶望がキリスト教的な愛によって贖なわれるという福音の教えを象徴的に読み取ることが避け難いためであろう。しかし、The Old Man and the Sea が教訓の見え透いた parable に終わっていない所以はあくまでもその頑とした現実肯定にあるように思われる。二枚の象徴的な絵の下で、Santiagoは安らかに眠ったかもしれないが、その小屋の外の世界はそれまでと全く変わるところがないのである。少なくとも、老人の“lost youth”たる Manolo少年にとって世界は相変わらず独り戦うべき場として在る、その“lutor”にとってそうであったように。

\*

\*

\*

テキスト : 高村勝治 (編), The Old Man and the Sea (英光社, 1970)

参考書 : Baker, Carlos, Hemingway : The Writer as Artist (Princeton V. P., 1952).  
 Bakker, J., Ernest Hemingway in Holland, 1925-1981 (Amsterdam, 1986).  
 Rovit, Earl & Brenner, Gerry, Ernest Hemingway (Twayne, 1986).  
 橋本福夫 (編), 『現代作家論 : アーネスト・ヘミングウェイ』 (早川書房, 1980).

脚注 :

- (1) William Faulkner, Shenandoah, III (1952), p. 55.
- (2) Ernest Hemingway (Twayne, 1986), pp. 68-9.
- (3) The Old Man and the Sea (1952; Eikosha, 1970), p. 15. (下線筆者)
- (4) “Cobre” は「キューバ島南東岸にある小さな町の名」である。高村勝治, Notes on “The Old Man and the Sea” (英光社, 1970), p. 20参照。
- (5) Op. cit., p. 8.
- (6) Hemingway : The Writer as Artist (Princeton V. P., 1952), p. 320.
- (7) 例えば, Carlos Baker, Ibid., p. 307.
- (8) Ibid., p. 293の欄外注参照。

- (9) Op. cit., p. 2.
- (10) Ibid., p. 55.
- (11) J. Donald Adams, "Speaking of Books", New York Times Book Review, September 21 (1952), p. 2. 参照。
- (12) Op. cit., p. 54.
- (13) Ibid., pp. 21-2.
- (14) Carlos Baker, op. cit., pp. 312 ff. 参照。
- (15) Op. cit., p. 98.
- (16) Ibid., p. 95.
- (17) Ibid., p. 96.
- (18) 例えば、橋本福夫(編), 『現代作家論:アーネスト・ヘミングウェイ』(早川書房, 1980)の序文, p. 13.
- (19) Op. cit., p. 68.
- (20) Ibid., p. 97. (下線筆者)
- (21) Ibid., p. 99.
- (22) Ibid., p. 6. p. 58. (下線筆者)
- (23) C. T. Onions (ed.), The Oxford Dictionary of English Etymology (1966), p. 874.
- (24) 例えば, Rovit & Brenner, op. cit., pp. 75-6.
- (25) Op. cit., p. 60.
- (26) Ibid., p. 47.
- (27) Ibid., pp. 84-6. 86. 88. (下線筆者)
- (28) Ibid., pp. 90-1. (下線筆者)
- (29) Ibid., p. 109.
- (30) Ibid., p. 116. (下線筆者)